



Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano © 転載許可済
© 1982 精道教育促進協会(宮屋)三・三四五二宮屋市船戸町12-1-6

教皇様の叢

夫婦は神の協力者

使徒教令〈フアマリアーリス・コンソルツィオ〉の抄訳。
公式訳は、いずれ中央協議会から出版されるはずで。

人は、愛である神の似姿

(…)キリスト教の啓示によれば、全人格をかけて愛するという召しだしには、結婚および、童貞あるいは独身という二つのはっきりとした道があります。いずれの場合も、それぞれの仕方、人間についての最も深い真理、つまり、〈神の似姿〉を具体的に表わすこととなります。

それゆえ、男女が、配偶者に固有な、また配偶者間のみゆるされる行為を通して、互いに与え合う手段としての性は、ただ生理的な面にとどまるのではなく、人格そのものの根底にかかわることがらであります。(…)肉体的に全てを与え尽すと言っても、万一、それが、全人格を与えつくす結果でないならば、嘘になってしまうでしょう。(…)

夫婦愛はすべてを要求しますが、この全てのなかには、責任ある子孫づくりが含まれて

います。生殖能力は出産を目的としますから、もともと、単なる生理的な面を超えて、人格にかかわる一連の価値に関係しています。これら諸価値が調和のとれた発展をとげるためには、夫婦が心をつなげて辛抱強く協力しなければなりません。

あらゆる意味ですべてを与え合うことが認められるのは、自由、またよく自覚した上でうけいれた、夫婦愛契約つまり婚姻という場においてのみ、であります。婚姻においてのみ、男女は、神ご自身のお望みのように、愛と生活という親密な共同体をうけいれるわけですし、そうして始めて、夫婦愛契約つまり婚姻の意味がすべて明らかになるのです。婚姻制度は、社会や権威者の不当な介入ではないし、外から型にはめたことでもありません。婚姻は夫婦愛契約そのものにどうしても必要なことであって、婚姻においてこの契約は、創造主である神のご計画にまぎれない忠実

を保つための、排他的契約として公に認められたわけです。神のご計画への忠実を保つからと言って、それが、自由を制限することにはなりません。かえって、主観主義、相対主義におちいる危険をまぬがれ、創造主の知恵にあずかることができるのです。(…)

教会の花婿イエズス・キリストと

婚姻の秘跡

神とその民との交わりはイエズス・キリストにおいて決定的な実現をみました。キリストは花婿であり、人々をご自分に一致させ、救い主として人々を愛し、人々にご自分をお与えになります。

婚姻のもともとの意味を明かし、人間の頑なな心をとぎ、婚姻についての真理が完全に実現されるようにしてくださいのがキリストであります。婚姻についての啓示がますますこころなく示されるのは、神のみことばが愛ゆえに人性をとり、花嫁である教会のために十字架上で犠牲となったときなのです。(…)

神のおことばを信実な心で受け入れ、教会は、信者同志の婚姻が新約の七秘跡の一つであることをはっきりと教えてきましたし、これからも教え続けることでしょう。

洗礼を受けた男女は実に、新しい永遠の契約、キリストと教会との婚姻の契約のなかに場所をしめることになりました。そうなるのは、創造主がお定めになった夫婦生活と愛との親密な共同体が、キリストの花婿としての愛によって高められ、受け入れられ、また、主の救いの御力に支えられ、豊かにされているからなのです。

婚姻は秘跡でありますから、夫婦はたがいに、解消することのできない絆で結ばれています。夫婦が相互に配偶者に属するということは、キリストと教会との関係そのものを、秘跡のしるしによって、(二人の間で)実際に再現することなのです。(…)他の秘跡と同じ

ように、婚姻も、固有な仕方、救いの歴史をほんとうに象徴しております。(…)婚姻は深い人格の一致を目指しますが、それは肉体的の一致をこえて、一つの心、一つの魂になることです。婚姻は、徹底的に相互の与え合いを認めるわけですから、不解消と忠実を要求し、また子を産むという行為にひらかれていなければなりません。

子供は婚姻のみのり

神のご計画によれば、家族というより大きな共同体の基礎となるのが婚姻であります。婚姻と夫婦愛は夫婦の冠(宝)である子供を産み、教育をほどこすことを目的としているからです。

愛とは、その深い意味からして、贈物であります。夫婦愛によって、夫婦が互いに知り合い、一つの体になります。夫婦だけにとどまるではありません。婚姻によって、夫婦は贈物をさしだすことができるようになるからです。つまり、新たな生命を産みだして、神の協力者となるわけです。かくして夫婦は、互いに与え合うだけでなく、子供をもたらし、夫婦の一致の永続的なしるしであります。(…)夫婦は、親になること、新しい責任という贈物を神から受けます。両親の愛は子供たちにとって神の愛のしるしとなるべきものです。「父から天と地とのすべての家族が起こったから(エフェソ3・15)です。

ところで、次のことを忘れるわけにはいきません。子供を産むことができなくても、夫婦生活に意味がなくなるのではない、ということ。肉体的に子を産むことができない状態であっても、夫婦にとっては、養子縁組、種々の教育に関する仕事、他の家族援助、貧しい人々や障害児援助など、人々の役に立つ仕事があるからです。(一九八一年十一月 王たるキリストの祝日)

神という「真理」の無限の宝

「私の言葉を守れば」あなたたちは真理を知る。」

「私はほんとうのぶどうの木である、(ヨハネ15・1-4) 私にとどまりなさい。(ヨハネ15・1-4)

本日教会はこの言葉で、みなさん方に挨拶致します。教会の諸大学で学問、研究に励まれる皆さんは、教師として、また学生として、あたらしい年度を始めようとしておられる。いま引用しました言葉は、きょうのミサにあつて、たえず鳴り響いている言葉で、すでによく知られたものであります。キリストがこれを使徒たちに語られたのは聖木曜日のことでありました。キリストはなにを言おうと望まれたのでしょうか。「ぶどうの木」のイメージはすでに旧約聖書でもいくどか使われています。それは「選ばれた民」を指し、かれらの実りのすくないことを嘆くという文脈で用いられていました。たとえば「イザヤ書」。

「私はぶどうの実を砕くことと待っていたのに、なぜうらなりしかできなかったのか。(5・4) 「選ばれた民」たちはこのイザヤの言葉を忘れていたのでした。「ぶどうの木」というイメージのこうした来歴を踏まえたいので、イエズスは自分こそ「ほんとうのぶどうの木」であるとお示しになったのです。御父の心くばりと期待にふさわしく応える(ほんとうのぶどうの木)。イエズスという実り豊かなぶどうの木には、たくさんの枝が手をひろげます。枝とは、信仰と愛によって、イエズスに接ぎ木され、生き活きと生きている人びとのことです。かれらのあいだを生命の樹液がめぐっていきまされ、それは実りを生むためにどうしても必要なものであり、「私がないと、あなたたちには何ひとつできない」

(ヨハネ15・5)、同時にまた、たくさんの実りをあげてこそそれは、生命の液という自分の意義を外に示すことができるのであります。したがって、実りをつけぬ枝はすべて、投げすてられ焼かれてしまう道理でしょう。(ヨハネ15・6参照)

だからこう命じられたのです。「私にとどまりなさい、私があなたたちにとどまっているように(ヨハネ15・4)私にとどまっています、私もまたかれのうちにいるなら、その人は多くの実を結ぶ。(ヨハネ15・4-5)」「イエズスにとどまる」とはどういうことか。それをイエズス自身ははっきりさせてくださるうとしています。それは愛から成り立っている。しかし愛は、感傷的な気持ちの動きに費されてしまうものではない。掟を厳しく守り、それを具体的に示してこそ、愛は立ちあらわれて来るのです。

キリストの弟子たち

以上がきょうのミサにおける福音書の内容です。だれにとつてもあてはまる一般的な意味だといえましょう。では、きょうという日にこの言葉を選んだ教会は、何を言おうと望んでいるのでしょうか。あなたがたは皆、キリストの弟子であります。あなたがたは皆、二十世紀最後の二十年に生きて、キリストのみ言葉に耳をかたむけている弟子であります。(…)とすれば、こう問いなおすことができます。う。「枝がぶどうの木にとどまっていますようにキリストにとどまる」とは、あなたがたにとって、あなたにとつて、どういう意味をもつのだろうか。「枝は、木にとどまるかぎり、

実をつける、そのように実をつける」とは、どういう意味なのでしょう。それはあなた全存在にかかわっていることなのではありませんか。キリストの奥義の啓示に存在をひらいておくためには、キリストから流れ出る恵みの樹液を、あなたの全存在にもっとも浸しこまなければいけない。愛において成し遂げられる信仰をおして、キリストと一致した生命を生きたこと——それがなければ、神という真理を深めていくことはできません。神ご自身も肉をもったみ言葉となられ、確実で満足のいく答えを求めてやまぬわたしたちの飢えを、満たしたもうたのですから。

「私の言葉を守れば」あなたたちは真理を知る。(ヨハネ8・31-32)じっさい「愛さない者は神を知らない。なぜなら神は愛だからである。(ヨハネ1・4-5)」

とすれば、日々の研究という仕事をおして、あなたがたが刈りいれるべき実りとは、たえず深められてゆく学識——「永遠の昔から沈黙につつまれていたが、永遠の神の命をうけ、預言者の書によって諸国に示され、いまあらわにされた奥義」(ローマ16・25-26)についての見識のことでありましょう。神学のつとめはここにこそあるのではないのでしょうか。信仰によって照らされ、愛から活力を受けた人間の精神が、神の啓示をえて、眼前に大きくひろがっていく巨大な領域を進んでいくこと——そうした認識の過程が神学研究でありましょう。

神学——神についての知

ここでしばらく考えてみましょう。神の大きさを表すために、私たちは言葉を用いるしかありません。しかし人間の言葉には限界があります。したがって神の大きさもその有限性の範囲でしか示せないことになります。ご託身にあってみ言葉のペルソナが、有限な人性のうちに限定されたのと、ちょうどお

なじなのです。神学は、これを忘れてはなりません。聖書に使われている言葉・イメージ。叙述を神学的に研究する場合にも、その研究は最終的には「無限」の御方へと至らねばならないはず。もともと私たちが、言葉やイメージなどの断片によって無限の分け前にあずかるよりないのですから。

したがって、神学は啓示全体との関連において進められねばなりませんし、その進展の行く先には、これまでの基本どおり完全な充滿たるキリストがおられるのです。

だからといって、啓示全体にそれ以上の注意は払わずにすませ、啓示の特定の局面だけに研究を捧げることが、いけないというわけではありません。特殊化は私たちの知性がある

婚姻は、徹底的に相互の支え合いを認めます

から、不解消性と夫婦の忠実を要求し、また、子を産むという行為にひらかれているべきです。

婚姻と夫婦愛は、夫婦の冠である子供を産み、教育をほどこすことを目的としている。

限であることの結果であり、神学においても当然認められねばなりません。しかし、他の学問とちがって、人間の力に限界があるからといって、研究対象の方もそれに見合っただけである、という具合にはいかならないということ、深く心にとめておく必要はありま

説教・講話・書簡等の抄記

う。神学研究は、どんどん細分化していく断片的な主題へとむかうのではない。そうではなくて、キリストご自身において、これ以上のものが考えられないような仕方です。示された総合へと、神学は向かっていくのです。

神学研究

神学は、「神の奥義」を詳細に吟味しようというものではありませんが、それとともに、「時のしるし」によって顕わされるさまじまな示唆に対しても、つねに目を向けていなければなりません。時どきの流行に盲目的にしたがうべきだ、というのではありません。「霊が諸教会に言われること」(黙示録2・7)を、現代にあっても、素直に素早く聴きいれるようにしなければならぬ、ということ。人びとの期待、貧しい者の苦しみ、学問上の新発見、聖人たちの提案から、聖霊のはたらきをへて生まれてきた示唆を、なんとか理解しようとしなければなりません。

成熟した神学のつとめとは、つまるところ、「聖伝」の光に照らして、現代を読み取る、ということでありましょう。「聖伝」は教会に委ねられ、教会に保たれています。それは生きていく命です。そこにはキリスト教の奥義に含まれるいろいろな富が含まれており、啓示のもつ永遠の価値を身につけて秘かにかくれていた実体が、歴史の転機となる出来事をきっかけにして、次第に聖伝のなから姿を現わして来るのです。神学者が現代の問題に対し真にキリスト教的な解答をみちびきだしたいと思えば、かれはこの「聖伝」という源にさかのぼらざるをえないのです。

熱心な研究

とくに神学について述べてきましたが、だからといって、みなさん方の諸大学で適切な研究が続けられている、ほかの学問の重要性を無視する意図はありません。そういった学

問のそれぞれに、教会の研究組織一般のなかで果たさねばならぬしつかりした役割があります。心からお願ひしたいと思います。ご自分の学問分野で熱心に研究にお励みください。一人ひとりが身を献げてはじめて、世界に福音を宣べ伝え、人類を前進させる、という活動のための最大の力を、教会は手に入れることができるからです。

神学のために特に時間を割いたわけは、教会全体として見た場合、そのなかで展開されている研究の試みは神学を中心まわっていると、わたくしが考えているからです。まことに、神学の下準備をし、神学のために道をととのえる学問があるもので、たとえば哲学はそうした例のひとつです。哲学のつとめはすべての神学研究に欠かせない理性的な道具を確保することである、と述べても、哲学の

謙遜こそ、人々の心のなかに入り込むための秘訣です。私たちは、宣教するみことばの上に立つ師でも、福音を伝えてあげる相手の師でもありません。むしろ、互いの召し使いであって、神の恩寵によって、いくばくかの人を救おうとして、みなに対してすべて(コリント前9・22)となったのです。

自律性をそこなうことにはなりません。聖トマスはさらにすすめて、次のように主張したのではなかつたでしょうか。すなわち形而上学は「神の認識へと全面的に秩序づけられている。だから神学的な学問と呼ばれるのである」(異教大全第三分冊25章)

教会法研究

ほかに、性質上神学を基礎にし、神学の展開であると同時に、その起源ともなっている学問があります。たとえば教会法です。そ

の仕事は教会の法制的な面を説明し、どのようにしてキリスト教の奥義の本質全体から教会の法的な組織構造が生じてくるかを示すこと——それが教会法の仕事です。また、たとえば教会史。教会全体の政治・社会的な面とか位階の代表者の活動・停滞を記述し報告するだけで、教会史の事が終わるわけではない。そんなことではなくて教会史は、歴史のさまざまな小道に神の民が入りこんで築きあげた一筋の道のりを説明し、人類の二千年にわたる歴史を通じて、福音のたねがもたらした新しさに、光を投げかけねばなりません。

生ける石、キリスト

ほんの一例としてあげたにすぎませんが、みなさんが関心をおもちのすべての学問が築きあげている、調和のとれた建造物を一瞥し

ていただけたことでしょう。建築物——そう聞けば思いは自然と「隅石」にむかいます。ローマの教会の基礎を固めた人物、使徒聖ペトロが、書簡で述べるあの隅の親石のことです。その「人間にすてられ、神にえらばれた尊い活きる石」(ペトロ前2・4)こそ、キリストにほかなりません。

イエズス・キリスト、本当のぶどうの木。イエズス・キリスト、本当の角石。

親愛なる先生がた、ならびに学生諸君、みなさんがたの全生涯をとおして、なかんずくこ

の年度のあいだどのようにして、建物を建てるという仕事を、やりとげていくおつもりでしょうか。

答えは、やはり使徒聖ペトロが示してくれています。「活きる石としてあなたたちも、この霊のたてものの材料となれ(…)聖なる司祭職をつとめ、イエズス・キリストによって神によりされる霊のいけにえを献げよ」(ペトロ前2・5) 別のことばでいえば、みなさんがたのなかにキリストがおかれた牧者と一緒「教会を形成すること」です。

「教会を形成すること」、これは命令なので。そしてそれにはふたつの内容があります。ひとつは、おなじ理想にささえられ、おなじ目的を目ざす、思想・感情・仕事の兄弟的結びつきをなかに生かすこと。いまひとつは、教会全体の結びつきをたえず考えあわせて自分を保つこと、つまり、みずからの積極的な態度で、兄弟につくす義務を果たすことです。神という「真理」の無限のたからを、いっそう広く、いっそう深く理解させてくれること、それを兄弟たちは期待しているのです。

教会の意義を深く考えれば、なによりも、神の置かれた土台以外のごとくに家をたてる危険をまぬがれることができましょう。教会は一番たしかな物差です。本当の「角石」ではなく、「邪魔物の石・つまずきの岩」(ペトロ前2・8)に出会うことが、不幸にしてありうるのです。隠すことはできません。事実が証明しています。それは、教会が権威をもって宣言している「みことば」(同右参照)への不従順な態度に由来するものであります。

愛によって生かされる

そんなことが起らぬように私たちが今日ここに集まって、神に祈りをささげています。愛が信仰を生かすときとさせ、そしてその信仰から湧き出て来る知恵がありますが、あなた方一人ひとり、イエズス・キリストにおい

不変の教え

て、その特別な知恵を生み、教会の建設に貢献することができましよう。

「選ばれた民族、王の司祭職、聖なる民、神の民」(ペトロ前2・9)となられた。そしてさらに、学者として教師として学生としてのつとめ——知識の獲得というこの仕事のすべてをおして、「闇からかがやかしい光にあなただちを呼ばれたお方の不思議」(ペトロ前2・9)をひろく公に述べ伝えるよう、召されています。

こうしてこそ自分が神の民の一員であり、これこそ、ほかならぬ自分の特別な定め、おなじ神の民のなかでだれあらぬあなただけが受けつぐ遺産であることを知ってください。この定めとこの遺産とをたくわえはぐくむことによって、みなさんは「あわれみを受けた」(ペトロ前2・9)ものとなることを知ってください。(…)

この聖体の祭儀のあいだ、聖霊に対し、次の言葉を祈りましよう。

主よ、知識・真理・平和の霊をお注ぎください。御身をお喜ばせるものが何であるかを知り、一致と平和のうちにそれをなしとけることができますように。

あわれみ深い神よ、われらの捧げ物と祈りに目を注ぎたまえ、真理と善があなたの眼前にかがやくまに、私たちに理解でき、それを証言して自由に福音を述べることが許されたまえ。

聖なる父よ、この神秘のうちにはたらきたもう御身の霊が、み旨を果す私たちを強め、なんん人に対しても御身の福音を証しできるよになしたまえ

「かくして信じるあなたたちには、誉れ」(ペトロ前2・7)

「あなたたちが多くの実をつけることは、私の父の光栄」(ヨハネ15・8)アーメン。

(一九八一・十・二十三)

「神学生を前にして、お話しになったことば」
「父なる神と主キリスト・イエズスから、あなたに恩寵と慈悲と平和があるように」(ティモテオ後1・2) 私は以上の使徒の言葉を借りて、みなさんにあいさつを送ります。(…)
また、聖パウロの次のことばを加えたいと思います。「私は、祈りのうちに夜も昼もあなたのことばを考えている」(ティモテオ後1・3 参照) なせそうするのかおわかりでしょう。教皇が深く心にかかえている教令に関するところがらなかに、

まず召しだしの問題があるからです。私は日毎、主に語りかけ、教会が今、緊急に必要としている寛大な若者たちが、辛くて苦しいけれどもよろこびの元となる仕事、やがて紀元二千年を迎える世代に福音を宣教する仕事に身を挺してくれるよう願っています。みなさん方神学生は教会の希望であります。

私はつねにみなさん方のために祈っています。ここでも、自分の弟子に会いたいと思む聖パウロのことばがびびりたりあてはまります。(ティモテオ後1・4 参照) 私も、キリストにおける愛する者であるみなさん方に会いたいと思います。「喜びに満たされたいがために」(ティモテオ後1・4)

神の御力を信じて

みなさん方は教皇の励ましと導きを受けるために、ここに集っておられる。キリストがお呼びになったとき、(神の賜)にゆえ、司教の(按手)を受けることができるためでしょう。この目的のためには、典礼のことばほど適切なものはないと思われまます。

福音を告げる人々へ

給仕する者のように 謙遜でありなさい

そこで、先ず私は、聖パウロの言葉を繰り返します。「主を証明することを恥じないで」(ティモテオ後1・8) ください。「神は恐れではなく、力と愛と節制の霊を私たちに与えられた」(ティモテオ後1・7) のですから。私たちは福音のうちに對する無関心、ひいては不寛容を誇りとするような世界に住んでいます。世俗化がいやがうえにも拡がり、人の物の考え方に悪影響を与えた結果、大勢の人々が世俗主義を奉ずるようになってしまいました。

神のみことばの奉仕者として、福音を伝えようとすると、途上によこたわることから困難を隠してみても始まりません。困難を予期して、主のお召しに応えようとする熱意がさまされ、自分の力を越えた使命に挺身するのが恐ろしくなってしまうかもしれないでしょう。しかし、聖パウロは、そのような誘惑に屈服せず、勇気をだして「福音のために苦しめ、自分の力に頼らず、神の御力」(ティモテオ後1・8 参照) を支えにせよと勧められています。事実、

聖パウロが好んで説くように、「宣教の愚かさをもって信じる者を救わなければなりません、神の愚かさは人間よりも賢く、神の弱さは人間よりも強いのですから」(コリント前1・21と25)(…)

現代人は、人間生活と活動を規制する構造やメカニズムについて多くを知っています。人間はミクロおよびマクロの世界を探索しました。しかし、それにもかかわらず、事物の究極の意や存在の意義のような、最も根本的な問いかけに対しては、なんら答えのもち合わせがない状態なのです。人間は、自分にとっても、他人にとっても、不可解ななぞ、なっています。信仰のみが充分満足の行く答えを与えてく

れます。みずからの運命について考える人々の知恵の苦しめ、たしかさを求める心にゆえてくれるのは信仰だけなのです。みなさん方はこのような答えの伝達者たるべく召されておられる。みなさん方は、まだみなさん方を知らないが、それでもみなさん方を待ち望んでいる世界にあって、証人とならなければなりません。(…)

叙階への招き

大勢の少年・青年男女が、みなさんの証しによって、キリストに出会い、キリストから何のために戦い、生き、死ぬかを教わる事ができるでしょう。

ご存知でしょうか、偏見と敵意にみちた人々の不信をのりこえ、その人々の心をとらえ、かくして司牧のみりをあげるには、何をすべきかを。イエズスご自身が福音書のなかで教えてください。「あなたたちの中でいちばん偉い者は年下のようになり、支配するものは給仕する者のようにならねばならぬ」(ルカ22・26)

謙遜こそ、人々の心のなかに入り込むための秘訣なのです。私たちは、宣教するみことばの上に立つ師でも、福音を告げる相手の師でもありません。私たちは、むしろ、互いの召し使いであって、神の恩寵によって、「いくばくかの人を救おうとして、みなに對してすべて」(コリント前9・22) となったのです。この点をしっかりと自覚し、そこから指針を得て毎日を生きたら、みずからの心のなかに場をもうけてキリストの霊を受けいれ、人々に對して最も役立つ心をもつことができるでしょう。「あなたたちの中でいちばん偉い者は年下のようになりなさい」。イエズスのことばは、招きであり、命令であります。キリストを(理解し)、キリストにおいて人々の心に達するための王道は、謙遜なのです。

(一九八二・二・二十六)

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部六十円送料六十円 二年予約七百二十円送料七百二十円 二十部以上一括購入なら送料不要

郵便振替 神戸 3-72393